

若き後輩諸君へ—先輩からのメッセージ—同志社大学で学ぶ意義

井上 勝也	同志社大学名誉教授
講師紹介【いのうえ・かつや】	

国家主義時代の教育と私

水谷誠先生の「建学の精神とキリスト教」という科目のお時間をいただいて、若き後輩諸君にお話をさせていただきますことを大変嬉しく、感謝申し上げます。

私は同志社大学文学部で四十五年間教壇に立ちまして、二〇〇四年に退職いたしました井上勝也でございます。

私は現在七十一歳で一九三六（昭和十一）年に生まれました。今日のお話の本題に入る前にまず私の生い立ちを聞いていただきたいと思います。私は一九三六年に生まれたと申しましたが、この年に二・二六事件が起きました。昭和のファシズムの嵐のど真ん中で幼少年期を過ごしました。私が幼稚園に入りました一九四一（昭和十六）年の十二月に太平洋戦争が始まりました。一九四五（昭和二十）年八月、敗戦の年は小学校（当時は国民学校と申しましたが）の四年生でした。私はそれまでの三年半の間に徹底的な国家主義、軍国主義の教育を受けたのです。一つ例を挙げましょう。担任の先生が毎日私たちに「人間の命は羽毛のように軽いものだ。だからお前たちは早く大きくなって兵隊さんになって、お国のため、天皇陛下のために戦地へ行け」と言いました。人間の命がダウンジャケットに入っている鳥の羽根の軽さにたとえられているのです。純粋な生徒たちは先生の言うことを信じ、早く大きくなって少年航空兵が戦車兵になりたいと思いました。毎朝担任の先生や校長から、お国のために、天皇陛下のために死ぬことが最大の名誉であると言われると、本当にそう思ってしまうのです。Mindcontrolです。このような教育を受けた多くの青年がペンを剣に持ち替えて学徒出陣し、戦地に赴いてとうとう帰ってきませんでした。戦死したのです。私の世代は、現在進められている教育再生会議の動きに注目しています。再生会議は最近教育基本法を改訂して、愛国心をもった生徒を教育する必要性を強調していますが、「ちょっと待った！」と言いたくなるのです。私は教育のもつ恐ろしさを体験した世代ですから。

一九四五（昭和二十）年八月の敗戦後数ヵ月たって、人間の命を羽毛にたとえた同じ教師が、今度は「人間の命は地球より重い」と言い出しました。何の説明もないままに、数ヵ月前まで言い続けていたことと正反対のことを言い出したのです。そのころの生徒は先生に質問したり、批判したりすることを知りませんでしたが、しかし心の中では「先生はウソつきだ」と思い、先生を信じなくなったのです。小学四年生の私たちは国の体制が国家主義から民主主義に変わったからといって、人間の命の重さがなぜこんなに変わるのかが理解できませんでした。

もう一つ、敗戦までの国家主義教育と敗戦後の民主主義教育の典型的な違いを例に挙げましょう。それは歴史の教育に見られます。敗戦までは国史といって歴代天皇の名前を暗記させられ、神話を中心とした国造りの歴史が中心で、天皇がいかに民衆に慈（いつく）しみの心をもって政治をおこなったかということを教えられました。ところが敗戦後の歴史教育は民衆が主人公になって歴史をつくってきたのだということです。これは我々も民衆の一人として授業に参加できますから、大変面白い、生き生きとした授業が可能になりました。私は中学・高校時代に将来教師になろう、そして体制が変わっても教えることを変えることのない教育をしたい、自分の受けた国家主義教育のように、先生の言うこと、教科書に書かれていることを鵜呑みにするのではなく、自分が敗戦の二学期以降に受けた手探りの民主主義教育で、生徒に「なぜだろう？」と問いつけ、生徒が自分で考えて答えを見つけ出す、そのような教育が本当の教育ではないか、と考えるようになりました。以上で最初の私の生い立ちの部分を終わります。

現在出川キャンパスのハリス理化学館の二階にNeesimaRoomというのがありますが、そこで「戦争と同志社」という展覧会をやっていますのでぜひごらんください。同志社が軍国主義の時代にいかに苦悩したかがよくわかります。

大海をも知っている蛙に

次に私の同志社大学の学生時代をお話します。

同志社大学の前身である同志社英学校は一八七五（明治八）年、新島襄によってつくられた学校で、キリスト教主義教育を中核にすえていましたので、創立後一九四五年の敗戦に至るまで、七十年間の国家主義の時代は新島の目指した教育がいろんな制約を受けました（キリスト教主義教育については後ほど申します）。新島の建学の理念が一〇〇パーセント自由実践できるようになったのは、やっと敗戦後のことであります。私が入学しました一九五四（昭和二十九）年は同志社の建学の理念が何の制約も受けることなく誇らかに実践され、また民主主義教育が手探りの時期を脱して軌道に乗り始めた時期でもあります。同志社では、専門教育の前に人間をつくる教育を重視する傾向があり、学生は広い視野をもって木を見て、それにとどまらず森全体も見ることのできる人間になることが求められました。井の中の蛙ではなく、大海をも知っている蛙になることも求められました。これは太平洋戦争で日本の為政者や軍部が二十倍の国力をもつアメリカに戦争を挑み、手痛い敗北をし、国の内外に多くの犠牲者を出した苦い経験の反省からでありましょう。二つ目は一面的なものの見方をよく批判されました。よく出される例ですが、富士山を太平洋側の田子の浦からだけ見て富士山だと思ふな、山梨県側からもヘリコプターに乗って上空からも富士山を見て、三六〇度立体的な富士山を捉えることの大切さを指摘されました。白が好きだという前に黒との対比で白を見なさい。それから真っ白が真っ黒だけでなく、中間色も、白に限りなく近い黒もあるという見方、一〇〇かゼロかで短絡的に判断するのではなく、五十一と四十九という僅差で重要な問題が決められることもあることに気づきなさいと言われました。また相手の立場になって考えなさい、とも言われました。このような総合的立体的な見方・考え方の大切さを我々学生に語られた先生方は、自分たちが戦争中に国家主義という一面的な価値観を学生に教えたことに対する深い反省があったからだと思います。国や一部の為政者に重要な判断を任せるとんでもない誤りを犯す。だから一人ひとりが自分の価値尺度をもって、その尺度が錆びつかないように常に磨いて、何が正しいか、間違っているかを自分で判断することを求められました。私が同志社大学で、以上申しあげたような見方・考え方があることを授業や講演会に出席して知ったときの驚きは「目から鱗が落ちた」といった表現がふさわしく、自分は同志社大学で学んでいるのだといった充実感が湧いてきました。それは大学入学までの私が狭い視野の人間でしたから。

チャペル・アワーで聴いた話が

さて当時の同志社大学には他の大学には見られないchapel hourという時間がありました。これは水曜日の二講時を全学休講にして、創立者新島襄の話や聖書を題材にした話や一人のキリスト者の生き方をとり挙げた話がされました。大学紛争後の一九七〇年代にこの時間帯に授業が組み込まれるようになりましたが、現在でも水曜日の二講時と火曜日の六講時にchapel hourがあります。私は学生時代このchapel hourに毎週さっしり出席していたわけではありません。しかし私の四年間の学生生活中に、このchapel hourで聴いた話が私の思想形成・人格形成の血となり肉となっている一つの例を申しあげましょう。私は学部の卒業論文及び大学院の修士論文で、スイスの教育者・教育思想家J. H. Pestalozziの人と教育思想の研究をしました。一九五〇～六〇年代の日本ではPestalozziの研究が盛んでありまして、当時Pestalozziは教育愛の実践者として、教育方法の改革者として注目されていました。しかし、Pestalozziが八十年の長い生涯のなかでプロテスタント・キリスト者として生きたことや、彼の教育活動、とりわけすべての子どもたちを我が子のように慈しむ彼の教育愛がキリスト教精神と密接につながっているという解釈をする研究者は当時の日本にほとんどいませんでした。私は人間の生き方の根底にあって、それを支配しているものが何であるかに目を向けないで、末端の現象的な部分にのみ光を当てる研究方法に疑問を抱いていました。私が立命館大学や京都大学の学生であれば、気づかなかった点であります。その重要性に気づいたのは、chapel hourやクリスチャン教授の講義のなかで触れられる宗教の問題を空気のように無意識的に吸っているうちに、人間・教育者Pastalozziを理解するにはキリスト者・教育者Pastalozziを欠落させてはいけないことに気づき、人間・キリスト者・教育者Pastalozziを総合的に捉える方法を同志社で学びとったからです。

新島襄の教育理念

私の同志社大学における教員時代に移ります。

私は大学院博士後期課程の一年目に助手に採用されました。一九六九・七〇年の大学紛争の一番激しかった頃は専任講師の時代でした。ラディカルな学生たちから我々文学部の教員は団体交渉の席で「お前たちは知識の切り売りをする専門馬鹿だ。俺たちが聴きたいのはお前たちの生き方との係りで述べられる主体的な言葉であり、解釈であり、命をかけた授業である」と厳しい批判を受けました。三十代前半の私にはこの言葉はまるでナイフが胸に突き刺さったような鋭さがありました。以後私は同志社大学に学び、同志社の学生さんに教える者として、自分の立脚点を固めるために創立者新島襄の人と教育思想を研究するようになりました。新島は二十一歳、ちょうど皆さんとほぼ同じ年齢で一八六四（元治元）年函館から密航を企て、アメリカは東海岸のニューイングランドで中等教育と大学教育と神学教育を八年間も受けました。彼は一年余の間にアメリカとヨーロッパの八カ国で教育調査をした経験もっています。新島は幕末の江戸で生まれ育ち、全く異なる文化圏であるニューイングランドで生活するうちに、プロテスタント・キリスト教とデモクラシーがニューイングランドの人のびの生き方を規定していることを学びとりました。彼は日本が列強に侵略されて第二の清国にならないためには、可及的すみやかに日本を近代国家にしなければならない、と考えました。アメリカが教育の力によって国造りに成功したように、日本でも教育の力をフルに用いて、とりわけ社会や国家のリーダーを育成する大学をつくり、彼らがデモクラシーを体得し、キリスト教を自己の宗教観、人間観に位置づけ、社会や国家の形成に従事するならば、日本を列強の侵略から救い、かつ近代国家を建設することができると考えるに至りました。このように新島が考えたのは、幕藩体制の諸矛盾の中で個を抹殺されていた彼がニューイングランドを中心としたアメリカに理想国家のモデルを見いだしたからです。すなわち彼は市民が一人ひとり政治に参加して、自分の町や祖国のために貢献することに生き甲斐を見だし、積極的に機関車役を引き受ける光景を目の当たりにしたからです。そこで彼は、一部の権力者に追隨する人民ではなく、祖国の建設と発展にプライドと責任を負うような人間を育てようとししました。彼は一八七四（明治七）年、十年ぶりに祖国日本に帰って、翌年同

志社英学校を創設し、それを大学に昇格させると共に日本中にキリスト教を広めることを畢生の事業としたといえます。私が一九五四（昭和二十九）年に同志社大学に入学して当時の教授たちから受けた教育は、戦後日本国憲法や教育基本法にもとづいた民主主義教育の実践である前に、あるいはあると共に、明治期から連綿と受け継がれてきた新島の教育理念、同志社の建学の理念が働いていたのだということがわかってきました。先ほど少し申しましたように、たとえば専門家を育成する前に幅広い視野をもち、社会の一員としての見識と義務を自覚した主体的な人間を育成することが不可欠である、といった人間の教育を重視する伝統です。このような伝統はとりわけ第二次大戦の深い反省とともに第二次大戦終了後、新島の建学の理念の再評価のなかで、我々学生に力をこめて教えられていたのだと考えられます。

「知・徳・体」

さて、皆さんは同志社の記事が△逆三角形を三つ組み合せたものであることをご存知でしょう。同志社でよく言われることですが、このマークは同志社教育の目的である知・徳・体の調和的發展を象徴しているということです。先ほどから申していますように、高い理想をかかげ、社会の底辺で苦しんでいる人びとに手を差し伸べるべ、社会や国家や地球の発展のために献身努力する。このような人間の育成を新島は理想としましたが、このような人間こそ知性と道徳性の間に、調和がとれ、合わせて健全な知性と道徳性が十分に機能するための器として健全な肉体の準備が求められます。ギリシャ・ローマの時代から人口に膾炙（かいしゃ）されてきました“Å soundmindinasoundbody.”「健全なる肉体に宿る健全なる精神」が必要だということです。新島は、健全な道徳性が知性をコントロールするのだと考えています。彼はしばしば「知・徳・併行」という表現を用います。

徳育としてのキリスト教主義教育

そして彼はまた「キリスト教主義をもって我が同志社大学徳育の基本と為す」（全集一、一三九頁）と一八八八（明治二十一）年に公にしました彼の大学構想である「同志社大学設立の旨意」で申しています。

新島はキリスト教教育とキリスト教主義教育を区別しています。キリスト教よりもキリスト教主義の方を幅広い概念として用いています。ちょっと説明しますと、キリスト教教育の教材を聖書に限定せず、聖書に源を発しながら、それが音楽の形で表現されているもの、たとえば、バッハの宗教音楽（マタイの受難曲など）、絵画の形で表現されているもの、たとえばレオナルド・ダ・ビンチやレンブラントの絵画であるとか、文学の形で表現されているもの、たとえば遠藤周作の『沈黙』や三浦綾子の『塩狩峠』であるとか、哲学の形で表現されたゼーレン・ケルケゴールの『死に至る病』であるとか、我々の身の回りには聖書の中で説かれているキリスト教的なものが文学や哲学や絵画や音楽などを通して表現されているものが沢山あります。またイエスに一步でも近づこうとして献身努力したA・シュバイツァーやマザー・テレサや新渡戸稲造や神谷美恵子といったクリスチャンの生き方もキリスト教主義の範疇に入ると考えられます。したがって、これらのキリスト者の伝記は、自分の生き方を模索している若者たちにキリスト者の生き方を具体的に示し、彼らの道徳性を磨き、心に豊かさを与える格好の教材になるのです。新島は「同志社大学設立の旨意」の中で「基督教主義は実に我が青年の精神と品行とを陶冶する活力あることを信じ、此の主義を以て教育に適用し、更に此の主義を以て品行を陶冶する人物を養成せんと欲するのみ」（全集一、一三九頁）と申しています。

新島の考える人間教育

新島は基督教主義が青年のcharacterbuilding人格陶冶に不可欠であるということです。彼はキリスト、あるいは聖書というストレートなアプローチを尊重しつつも、しかし文学を通して、音楽を通して、キリスト者の伝記を通して、超越者の存在を知り、イエスの生き方を学ぶ方法がありますよ、ということです。聖書は人間に「如何に生きるべきか」を指し示してくれます。新島は、イエスは宗教的指導者であると共に人間形成にかかわる教育者「人類の教師」であると考えていたのではないかと思います。若き日に「汝の救い主を覚える」（旧約聖書「伝道の書」一二章一節）ためには色んなアプローチがありますよ、と彼は言っているように思うのです。新島がアーモスト・カレッジに学んだのは一八六七年から七〇年ですが、そのころのアーモスト・カレッジでは地質学（geology）が重視されていました。なぜだと思いませんか。地質学を自然科学の一領域として教えるというよりも「造化の妙」すなわち天地万物を造りたもうた造物主の巧みさ、不思議さ、偉大さを理解させるために用いられているのです。

新島は一八六四年、二十一歳のときに国禁を犯してアメリカに密航を企てました。命がけの大胆な行為です。十年ぶりに帰国した彼は一八七五（明治八）年に一〇〇〇年間も天皇の都であった京都の地に耶蘇教の学校をつくり、二〇〇〇を越える寺院を相手に戦いを挑みました。これは無謀のそしりをまぬがれない行為でした。強い新島を思います。他方、同志社英学校設立の一八七五年から七七年頃まで、すなわち同志社の草創期に新島は京都府からにらまれ、仲間であるはずの宣教師からつき上げられ、八方塞がり、もうギブアップだと弱音を吐いています。しかし、新島は旧約聖書のヨシュア記一章九節の「強く、また雄々しくあれ。あなたがどこに行くにも、あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない。おのいてはならない」という聖句を思い出して、神が常に自分を見守ってください、力を貸してくださいことを信じてこの難関を克服するのです。新島の考える人間教育では哲学や倫理学や心理学や法律学や政治学や数学を始め、もろもろの自然科学の科目によって知性を磨くだけではなく、知性が正しい目的に用いられるためにはしっかりした道徳性が不可欠だと先ほど申しました。そして彼は人間が罪深い存在でありながら、神によってゆるされ、神によって愛され、守られ、力を与えられていることを自覚したときに、彼の主張する人間教育が完成すると考えたようです。彼は次のように申しています。「神ヲ知り、敬シ、恐レ、且信愛スルハ人ノ最大切ナル者ニシテ、之無クンバ人迷ニ陥リ、又ハ物ノ奴隸トナリ、決シテ自由ノ人ニナル能ス」（「文明の基」全集一、三四六頁）

詩「あしあと」の意味

皆さんは、同志社在学中に「汝の造り主を覚える」心境にまでたとえ到達しなくても、次に紹介しますような詩に少しでも関心をもって、その意味に理解を示されるならば同志社に学んだ意義があります。いずれ長い人生の間に出くわすかもしれない挫折や不幸に会ったとき、この詩を再び思い出してみて下さい。新島がギブアップを真剣に考えたときに「ヨシュア記」の聖句が再び彼に立ち上がる勇気を与えたように、あなた方に希望とやる気を起こしてくれるでしょう。同志社の教育は十年、いや二十年先の皆さんのことを考えていますよ。

詩を読んでみます。

あしあと

マーガレット・F・パワーズ

ある夜、わたしは夢を見た。

わたしは、主とともに、なごさを歩いていた。

暗い夜空に、これまでのわたしの人生が映し出された。

どの光景にも、砂の上にふたりのあしあとが残されていた。

ひとつはわたしのあしあと、もう一つは主のあしあとであった。

これまでの人生の最後の光景が映し出されたとき、

わたしは、砂の上のあしあとに目を留めた。

そこには一つのあしあとしかなかった。

わたしの人生でいちばんつらく、悲しい時だった。

このことがいつもわたしの心を乱していたので、

わたしはその悩みについて主にお尋ねした。

「主よ。わたしがあなたに従うと決心したとき、

あなたは、すべての道において、わたしとともに歩み、

わたしと語り合ってくださいと約束されました。

それなのに、わたしの人生のいちばんつらい時、

ひとりのあしあとしかなかったのです。

いちばんあなたを必要としたときに、

あなたが、なぜ、わたしを捨てられたのか、

わたしにはわかりません。」

主は、ささやかれた。

「わたしの大切な子よ。

わたしは、あなたを愛している。あなたを決して捨てたりはしない。

ましてや、苦しみや試みの時に。

あしあとがひとつだったとき、

わたしはあなたを背負って歩いていたのだ。」

おわりに

私は最近『同志社大学案内二〇〇八』の各学部の特徴を調べてみました。同志社は建学の理念を、そして同志社の独自性を打ち出した教育をしているという実感をもちました。要は皆さんが同志社的なものを積極的に求められることです。そうすれば与えてくれる大学ですよ、と申しあげて私のお話を終わりたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

二〇〇七年六月十五日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録